

《その他》

三宅雪嶺と嘉納治五郎

平島 敏幸

Relationship between Setsurei Miyake and Jigoro Kano

Toshiyuki HIRASHIMA

キーワード：オリンピック，柔道

Key Word：Tokyo Olympic, Judo

流通経済大学三宅雪嶺記念資料館は、平成14（2002）年に開館した。資料館は、雪嶺の旧蔵書・旧蔵品を、雪嶺の嫡孫に当たる三宅立雄名誉教授が大学に寄贈したことにあった。

嘉納治五郎は、講道館柔道の創始者であり、NHKの大河ドラマ「いだてん～東京オリンピックの巻～」の主要な登場人物の1人である。東京高等師範学校の校長であり、東洋初の国際オリンピック委員会委員となった。

では、三宅雪嶺と嘉納治五郎はいかなる関係があったか？

三宅雪嶺と嘉納治五郎は、万延元年、1860年に生まれた。時は幕末、井伊直弼を江戸城で暗殺した「桜田門外の変」が起こった年である。

嘉納は明治7（1874）年に官立外国語学校に入学、8年に同校を卒業、官立開成学校に入学、10年に同校が東京大学に改称されると文学部に編入した。

一方の雪嶺だが、明治8年に名古屋の官立愛知英語学校に入学し、9年には上京して、東京開成学校予科に入学、10年に東京大学予備門

（開成学校を改正）、12年に東京大学文学部に進み、哲学科を専攻した。

雪嶺と嘉納は、同じ年に誕生して、同じ東京大学文学部に入学したが、入学は雪嶺の方が2年後輩になった。



開成学校から東京大学へ進む頃に、雪嶺は嘉納についてこんな風に書いている。「殊に高知県から出た千頭清臣、福富孝季、仙石貢等が主導者の形を呈し、事があれば人をなぐり、さういふことを必要とも心得た。」「ある日、（千頭は）嘉納治五郎が気に喰はぬとて、ひどく殴りつけ、嘉納が手向ひするを得なかつた。それがくやしくて柔術を習ひ、後に柔道を世界に広めるに至つたが、もとはといへば、千頭になぐられたのに始まり、千頭が間接に柔道を盛んにしたことになる」。^{【注1】}



嘉納と雪嶺は、明治14年と16年に東京大学文学部を卒業した。詳しく言うと、文学部「哲学、政治学及理財学科」は嘉納が卒業した学科、文学部「哲学科」は雪嶺が卒業した学科となって

いる。なお、日本哲学の源流に位置づけられているのは、井上哲次郎・岡倉天心・嘉納治五郎（明治14年卒業）、有賀長雄（15年卒業）、三宅雪嶺（16年卒業）、井上円了（18年卒業）、清沢満之（20年卒業）らがいた。

17年1月、有志数10名が会合し、「哲学会」創立を相談した。東京大学の哲学科を中心に運営されている学会である。これを哲学会の第1回例会として、その第5回例会で嘉納「意を論ず」、第6回例会で雪嶺「耶蘇を論ず」を講演している（両方とも明治17年）。

哲学の啓蒙時代と呼ばれた明治前期に、『哲学汎論』（明治20年、哲学書院）が出版された。帝国大学文科長・外山正一、前大学総理・加藤弘之、および大学卒業者が分担で執筆した。この中で「総論の部」は雪嶺が「哲学の範囲を論ず」を記した。「宗教哲学の部」は嘉納が「功利教を論ず」をしたため、ベンサム・ミルを主として扱っていた。

井上円了が開設した哲学館（後の東洋大学）でも、『哲学館講義録』を発刊していた。嘉納は、棚橋一郎とともに倫理学科目を担当し、「倫理学（批評）」を執筆した。雪嶺も「希臘哲学史」「近世哲学史」を刊行していた。

雪嶺も嘉納も、海軍軍人の広瀬武夫を早いうちに知った。広瀬は日露戦争において明治37年の旅順港閉塞作戦に従事し、行方不明の杉野孫七兵曹長を捜すうちに戦死して、「軍神の第1号」と呼ばれた。

嘉納は、講道館で広瀬の才能を高く評価していた。具体的に言えば、明治20年11月講道館に入門し、32年4月に4段に昇段した。広瀬の戦死の報が伝えられた時、嘉納は人目もはばから

ず「男泣きに泣いた」という。

広瀬が少尉に任官し、明治24年に軍艦「比叡」に乗船した。この時、雪嶺は初めて広瀬を知り、以来、交誼が続いた。広瀬が戦死したと聞き、「中佐は渾身武士的にして、体格に於て武士の模範、執務に於て武士の模範、而して娛樂に於て武士の模範たりしもの～中佐の如きは完人に近き人乎」^[註2]と褒めている。

スポーツについては、明治44年に朝日新聞が「野球害毒論」についての記事を掲載し、新渡戸稲造（第一高等学校校長）をはじめとして、乃木希典（学習院院長／陸軍大将）、各地の中学の校長などがそれに続いた。これらの「野球害毒論」に対抗し、読売新聞は嘉納治五郎（東京高等師範学校校長）、高田早苗（早稲田大学学長）、鎌田栄吉（慶應義塾塾長）などが「野球擁護論」を展開し、三宅雪嶺、押川春浪、安部磯雄らは、「野球問題大演説会」を開催した。嘉納も雪嶺も「野球擁護論」につき、「野球害毒論」を批判していた。

嘉納は、同じ44年に大日本体育協会を設立してその会長となり、翌年、日本が初参加したストックホルムオリンピックでは団長として参加した。嘉納が「擁護論」に就いたのは故なき事ではなかった。

ついでながら、雪嶺がこの大会にどのように見ているか、引いてみる。「夥しき見送りにて新橋を出発し、西比利（シベリア）鉄道にて北欧に向ひ、一月余の練習を経て出場せるが、風土に慣れずして失敗し、金栗（四三）は競走の中途に卒倒せり。されど日本国内にて国際オリンピック競技に興味を催すは実に是れよりせり」^[註3]。

昭和に入って6（1931）年、8月2日に人見絹江が没した。25歳であった。雪嶺は『同時代史』に次のように人見を悼んだ。「日本女子体育専門に学び、大阪毎日新聞社運動課嘱託となり、身長5尺6寸、体重15貫、17歳より8年間競技にて一世に知らる。……昭和3年アムステルダムの第9回国際オリンピックに800米にて2等を占め、同5年プラグの第3回国際女子オリンピックに走幅跳に1等、……日本女子競技界に貢献す」^[註4]。

アムステルダム・オリンピックでは日本女子選手として初出場し、女子800メートルはドイツのリナ・ラトケに次ぐ2着となった。しかし「決勝点に入りて2人共に昏倒す」^[註5]となり、これが影響して女子800メートルはメルボルン・オリンピック（昭和31年）まで種目から除外されることになった。

昭和7年、嘉納治五郎IOC委員により東京招致の正式招請状がIOC総会に提出された。東京市・日本政府の活動があり、嘉納をはじめとするIOC委員の尽力もあって、東京の可能性が高まった。11年7月、東京市が4年後のオリンピック開催の権利を入手した。しかし、12年7月に日中戦争が勃発し、国内では物資の統制が進んだ。海外では、戦争に反対する声が高まり、ボイコットを受ける恐れも予期されるようになった。

昭和13年3月、カイロのIOC総会で、嘉納らの工作や説得があり、東京開催の方向で進むこととなり委員が賛同した。IOC総会からの帰国途上の13年5月、嘉納は氷川丸の船内で肺炎により死去した。享年77。嘉納の棺には、五輪の旗がかけられていた。

嘉納の死をきっかけに返上論が多数を占めるようになり、2カ月後、東京市は開催を返上した。昭和15年の「幻の東京オリンピック」から24年、昭和39年のアジアで初の東京大会になるまで待たねばならなかったのである

昭和16年12月、太平洋戦争が始まった。18年に中野正剛が東条内閣を批判した。中野は、独裁者的であった東条英機首相を攻撃して、倒閣運動を起こした。そのため東条の憲兵政治によって逮捕・拘禁され、10月になって自決した。

実は、中野正剛は、ドラマ「いだてん」で登場する緒方竹虎の修猷館時代からの親友であった。緒方は「（中野の）父君と長男と次男と細君と、そして最後には彼の葬儀と、五たび彼の家の葬儀委員長をした」^[註6]。中野の葬儀委員長の時には、緒方は東条首相からの供花を拒否したのである。

同時に、中野正剛は、雪嶺の義理の息子であった。三宅立雄名誉教授はこう話す。「（中野は）祖父の言論活動の支えでもあった。80歳をこえた祖父の落胆は大きく」「頭を抱えたまま」「廊下を行ったり来たり」^[註7]した。雪嶺は、戦後、間もなくして亡くなった。享年85であった。

戦後、嘉納^{りせい}履正は、昭和25年に全日本柔道連盟の初代会長となった。39年の東京オリンピックで、柔道を正式種目として扱えるよう尽力、成功している。嘉納履正は嘉納治五郎の次男である。柔道は明治15年、嘉納治五郎に創始され、80年ばかりしてオリンピックの正式種目に入ったのである。柔道は男子のみで、階級も4階級で実施された。

中でも、岡野功は茨城県龍ヶ崎市出身で、縁が深い。龍ヶ崎第一高等学校を卒業し、中央大

学に在学中の東京オリンピックに、中量級の日本代表として出場し、金メダルを獲得した。翌40年4月、龍ヶ崎市に流通経済大学が開学した。岡野は、55年より同大学柔道部監督、部長を務め、その後、同大経済学部の教員となっている。平成18（2006）年4月、流通経済大学はスポーツ健康科学部を開設した。岡野は、同学部教授、その後は名誉教授となり、今に至っている。



20代の嘉納治五郎（公益財団法人 講道館 所蔵）

【注1】三宅雪嶺『大学今昔譚』大空社（日本教育史基本文献・史料叢書8），平成3年，46頁，50頁。

【注2】『風聞録』『日本人』第209号，明治37年4月20日。

【注3】三宅雪嶺『同時代史』第4巻，昭和27年，岩波書店，152頁。

【注4】三宅『同時代史』第6巻，昭和29年，249～250頁。

【注5】三宅『同時代史』第6巻，92頁。

【注6】緒方竹虎『人間中野正剛』中公文庫，昭和63年，12頁。

【注7】旧制東京高等学校記念誌『篝火』134頁。



文化勲章を受章した三宅雪嶺（昭和18年）



英国ウィンザー城における三宅雪嶺（右，明治35年）



雪嶺一家（明治39年3月），赤坂の自宅にて